

殯と宮

——日並皇子挽歌の背景——

上野誠

序

柿本人麻呂は『万葉集』中にいわゆる八殯宮挽歌[△]と
呼ばれる三つの作品を残している。

(ア)日並皇子尊の殯宮之時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一
首短歌を并せたり

(2・一六七～一七〇)

(イ)高市皇子尊の城上の殯宮之時、柿本朝臣人麻呂の作
る歌短歌を并せたり

(2・一九九～二〇二)

(ウ)明日香皇女の木籬の殯宮之時、柿本朝臣人麻呂の作
る歌短歌を并せたり

(2・一九六～一九八)

の三作品群である。これらの作品をひとつにくくることが

は次の二つの理由による。第一には、作品の形式が長歌
十反歌(短歌)から成り立つものであること。第二には、
△うた[△]自身の内容も基本的には宮廷寿歌の流れに即
し、併せて皇子・皇女たちの死に対する哀悼が表出され
ているということによる。

『万葉集』に伝えられる人麻呂作歌のうち、近江荒都
歌(1・二一九～三二)と並んで最も初期の作品に位置する
のが日並皇子挽歌である。また人麻呂作歌中で年代の確
定し得る最後の作品は明日香皇女挽歌である。柿本人麻
呂は「殯宮之時」挽歌によって『万葉集』に登場し、「殯
宮之時」挽歌とともに『万葉集』からその姿を消す。『万
葉集』によってうかがい知ることのできる人麻呂の作歌
生活全体をおおして、人麻呂は「殯宮之時」挽歌を作り
続けたといえる。この三つの壮大な挽歌が人麻呂個人の

感傷により作歌されたとは考えにくい。さらに「殯宮之時」という題詞を持つ挽歌を集中に伝えるのは人麻呂だけである。これらの外的条件を総合して考えると、おそらく持統朝においてこの種の挽歌の奉獻に対して、人麻呂が独占的立場にあったことを意味するものと思われる。以上のことは人麻呂の宮廷内における職掌に関わったのこともみて差し支えないだろう。

しかしながら、この挽歌が共通して何を歌おうとしているのかということについては、いまだ結論が見出せない状況にある。すなわち、各挽歌の後半に登場する「真弓の丘に 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして……」、「麻裳よし 城上の宮を 常宮と 高くしまつりて……」などと表現される部分をめぐり、これを真淵以来の通説にのっとり陵墓と解しようとする諸論¹⁾と、これを題詞どおりに殯宮にとらうとする諸論²⁾とがあるからである。本稿は後者の立場を支持し、殯宮説をとる。あくまでも題詞を尊重して読むかぎりにおいて、この部分は殯宮を表現したものであると見ざるを得ないからである。以上の内容を踏まえた上で、殯宮の表現のあり方とその表現が生まれてきた背景を考えてみたいと思う。しかし、三つの「殯宮之時」挽歌はそれぞれ質も違い、一概にこれを論ずることはできない。そこで本稿では三

つの「殯宮之時」挽歌の中で最も成立の早い、日並皇子挽歌の八殯宮の表現のしかた³⁾について考えてみたい。

一、殯と殯宮

まず、人麻呂挽歌の題詞にある殯宮について考えてみたいと思う。「殯宮之時」の「殯」という文字は『説文』がその字義を説明するように、³⁾葬柩に遷す前に、死者を大切な客としてもてなすということである。そのことは「礼記」等の記載によっても確認できる。⁴⁾また『文選』を見ると、⁵⁾陵墓におもむく前の死者との別れの場であることがわかる。『古事記』『日本書紀』『万葉集』には「殯斂」「殯」「殯宮」「大殯」などの用例がある。『万葉集』では、

大王の命畏み 大荒城の 時にはあらねど 雲隠り
ます (3・四四一)

とあるところから「殯」をアラキと訓じている。このように見てゆくと人麻呂挽歌の題詞の八殯宮⁶⁾がどのようなものを示しているのか問題となる。『記』『紀』のアメワカヒコの話の条は、殯宮の儀礼を投影する神話とみられるが、その叙述を比較すると次のようなことがいえるのではないだろうか。『記』にはアメワカヒコが亡くなると「喪屋を作りて」とある。これに対して『紀』では

「喪屋を造りて殯(もがり)す」とある。殯宮とは殯の儀礼が行なわれる宗教施設と考えてよいから、殯の儀礼を行なうという機能の面からみると喪屋と同じとすることができる。⁽⁶⁾ いわゆる大化の薄葬令は、王以下の者が殯の儀礼を行なうことを禁止している。このことを考え合わせると、民間の習俗としての招魂儀礼や死後儀礼のため敷設(モヤ)は存在したであろうが、⁽⁸⁾ 殯の儀礼は王権に専有されることになったとみられる。⁽⁹⁾ 多くの天皇の場合、殯宮は崩御から数日の後、宮の南庭に営まれた。人麻呂挽歌の「殯宮之時」という題詞の示すところは、皇子・皇女たちの遺体が殯宮(殯の儀礼を行なう宗教施設)に安置されている時ということになる。

二、日並皇子挽歌の殯宮表現

殯の儀礼が行なわれる宗教施設を人麻呂は日並皇子挽歌の中に次のように表現している。

…いかさまに 思いほしめせか 由縁もなき 真弓
の丘に 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知り
まして 朝ごとに 御言問はさず 日月の まねく
なりぬる…
(2・一六七)

日並皇子挽歌の殯宮は△死せる皇子の宮▽として讚美されているのである。これと同じ表現を人麻呂は吉野離宮

歌において使用している。

：国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と
御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮
柱 太敷きませば：
(1・三六)

吉野離宮歌の場合、人麻呂は択一発想によって国を讚め、吉野の風土を讚美して、続く部分において「宮柱太敷く」という詩句で離宮を讚めている。宮柱とは当然のことながら離宮の柱を示すが、離宮を讚めるにあたって、その離宮を支える柱を讚めているのである。古代において宮を建てるということは、単に宮を建てるという意味にとどまらない。△宮を建てた▽△宮に居る▽と表現することはそのままその宮での統治を意味する。そのような表現の伝統は古く、金石文の時代にさかのぼる。例えば、大王・天皇をその宮をもって呼称することは、江田船山古墳太刀銘や稲荷山古墳鉄剣銘から『万葉集』の標目に至る伝統がある。すなわち△大王・天皇▽と△宮▽、△大王・天皇の統治▽と△宮▽とは不離一体の関係があると考えられる。以上のことを念頭において「宮柱(真木柱)太敷く(知る)」という用例を見てゆくと、例えば笠金村の難波行幸歌において長柄の宮と長柄の宮での天皇の統治を、

おし照る 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人

皆の 思ひやすみて つれもなく ありし間に 續
麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食国を
治めたまへば… (6・九二八)

と表現している。「久迩の新しき宮を讃むる歌」においても、久迩京の風土が讃美され、そこに宮まれた宮が次のように表現されている。

現つ神 わが大王の 天の下 八島の中に 国はし
も 多にあれども 里はしも 多にあれども 山並
の 宜しき国と 川次の 立ち合ふ里と 山城の
鹿背山のまに 宮柱 太敷きまつり 高知らず 布
当の宮は… (6・一〇五〇)

これらの用例に対して、大伴家持は「族を喻す歌」の中で神武天皇の橿原宮創業と皇孫の統治を、

…秋津島 大和の国の 橿原の 畝傍の宮に 宮柱
太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の
天の日嗣と 継ぎて来る 君の御代御代…

(20・四四六五)

のように表現している。以上の用例を一見してわかることは、「宮柱太敷きいまし」という表現は、儀礼長歌の中で宮を表現する常套詞章ということである。換言すれば、『万葉集』中において、この「宮柱太敷きいまし」という表現は、儀礼歌中の宮を讃える詞章の一部として

機能しているといえる。

祝詞の中にも「宮柱太敷きいまし」という表現はよく登場する。枚挙にいとまがないのでうち二例を示すことにする。

座摩の御巫の辞竟へまつる…：皇神の敷きまつ、下
つ磐根に宮柱太知り立て、高天の原に千木高知り
て、皇御孫の命の瑞の御舎を仕へまつりて…

(祈年祭)

掛けまくも恐き明つ御神と、大八島国知ろし食す天
皇命の大御世を、手長の大御世を齋ふと

もし後の齋ひの
時には後の字を

加へして、出雲の国の青垣山の内に下つ石根に宮
柱太知り立てて、高天原に千木高知りてます、いざ
なぎの日のまな子… (出雲国造神賀詞)

祝詞の「宮柱太敷きいまし」という表現で注意すべきことは「高天の原に千木高知りて…」という表現と対になってあらわれてくるということである。「高天の原に千木高知りて」という表現は建物の高さを誇張した表現である。それではこの「高天の原に千木高知りて」という表現の「高天の原」とはいったいどのような空間をイメージすればよいのだろうか。太田善麿氏は「高天の原」の示す対象を三つに分けて考察すべきことを強調されている。その三つとは①天上世界を意味する「高天の原」

②下界から見える上空・天空を意味する「高天の原」③空というほどもなく空中の上方・高所を意味する「高の原」の三つの分類である。太田氏は「宮柱太敷きいまし」と対になって用いられる「高天の原」は③の意とされる。「底つ磐根に宮柱太敷きいまし高天の原に千木高知りて」という表現は△磐石な岩盤・大地に太い柱を立て、天に向ってそそり立つ高い宮▽を表現したものである。では祝詞の中でこの表現はどのように機能しているのだろうか。祝詞の中では、祀られる神が由来あつて、祝福されその地に鎮座していることを語る詞章として機能している。おそらく、この表現は祭儀の中で神々の鎮座の由来を語る詞章として生れ、定着した常套表現なのであろう。

『古事記』の天孫降臨条や、『日本書紀』の神武天皇即位の古語の中でもこの詞章は機能している。『記』天孫降臨の条では、天孫降臨の地を讃めて、

「此は韓国に向ひ、笠沙の御前に真來通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地」と詔りたまひて、底津石根に宮柱布斗理、高天の原に永椽多迦斯理て坐しき。

と記述されている。『日本書紀』の神武天皇の即位の条を見ると△樞原宮での即位▽△二柱の皇子の誕生記事▽

に引き続き、即位を祝福するフルコトが伝えられている。

故に古語に称して曰く「敬傍の樞原に、宮柱底磐の根に太立て、高天原に搏風峻峻りて、始馭天下之天皇を、号けたてまつりて神日本磐余彦火火出見天皇」と曰す。

『紀』の伝えるフルコトには、はじめに樞原の宮での即位を「宮柱太知り…」という詞章で述べ、アマツヒコヒコホノニギノミコトの豊稜靈を継ぐものとしての神武天皇の諱がひと続きの詞章として伝えられているのである。

そこで、これまで見てきた「宮柱太敷きいまし…」という表現についてまとめておく。

①この表現は、古代の御舎の姿を表現し、宮を讚美する伝統的祝福詞章であり、『万葉集』中では儀礼歌の常套的な宮の表現である。

②祝詞の中では「宮柱太敷きいまし、高天の原に千木高知りて…」と対をなして、神々の鎮座の由来を語る詞章として機能している。おそらくこの表現は、神事の中で、神々の鎮座の由来を語る詞章として発生、形成されたものである。

しかし、以上の①と②の点を以て、人麻呂が祝詞や『記』

『紀』の原形をなすものから「宮柱太敷きいまし…」という表現を学んだのであると即断することはできない。

ここで問題なのは、この表現が宮にも殯宮にも通用した表現であるということである。呉哲男氏は殯の儀礼の場がオホトノとして表現されるのは、古代の王はオホトノで死ぬべき存在であり、殯宮がオホトノから分離（祭場の分離＝複製）した歴史に由来するといふ。前述したようにこの「宮柱太敷きいましみあらかを高知りまして…」という表現は△堅固で高層＝立派な宮Vを表わそうとする表現である。かえりみて、殯宮とは仮設的建造物と思われる。その理由は天皇の場合であっても死後数日で南庭に殯宮が建てられていたからである。このことから推測しても、壮大な宮殿であるとはいえないだろう。このような仮設的建造物に対して、「宮柱太敷きいまし…」という表現をとるのはどうしてだろうか。それは殯宮が△死せる皇子の宮Vとして強く意識されたことを意味する⁽¹³⁾。それとともに、皇子の御魂の安からんことを願う気持ち⁽¹⁴⁾を汲み取ることでもきよう。

もう一つ大切なことは、「宮柱（真木柱）太敷く（知る）」という表現は、神や神の立場に立つ天皇などの絶対者の行為としての宮造り、宮遷りの表現だということである。人麻呂は、このような絶対者の行為として、日並皇

子が殯宮を営んだことを語ろうとしているのである。⁽¹⁴⁾

三、頌から哀へ

人麻呂は高市皇子・明日香皇女挽歌の中では殯宮を「常宮」と表現している。この表現の基底にも前章で説述したような意識、△死せる皇子・皇女Vの宮という意識が働いていることは間違いない。しかし、日並皇子挽歌と他の二挽歌とでは、その表現のあり様が違うように思われる。日並皇子挽歌では「天つ水 仰ぎて待つ⁽¹⁵⁾にかさまに 思ほしめせか…」とひとつながりに突然暗転して、「…由縁もなき 真弓の丘に 宮柱太敷きいましみあらかを 高知りまして…」と殯宮が表現される。すなわち、日並皇子挽歌の殯宮の表現は皇子の即位への期待に引きつけられて表現されているのである。もともと、この「宮柱太敷きいまし…」という表現は、祝詞や『古事記』天孫降臨条や『日本書紀』神武天皇即位の「古語」で見たように、神や天皇の統治と密接に関わる表現である。以上の視点を大切にして、日並皇子挽歌の文脈をたどり、整理をしてみたい。

…わが大王 皇子の命の 天の下 知らしめしせ
は 春花の 貴からむと 望月の 満はしけむと
天の下 一に云ふ 食す四 四方の人の 大船の 思ひ頼みて

天つ水 仰ぎて待つに： (2・一六七)

と皇子に対する即位への期待がえんえんと述べられている。この部分は、冒頭部の八天孫迩迺命の降臨神話Vと八天武天皇の飛鳥浄御原宮での統治と崩御Vの重ね合せの叙述を受けて表現されている。天孫迩迺命から続く皇統と英主天武天皇と日並皇子を一体連続したものと表現したのである。このような皇統讚美から突然暗転。「：いかさまに 思ほしめせか：」以下の皇子の死の叙述部分となる。人麻呂は皇子の死を八皇子が殯宮を定め、そこに籠られたVと表現するのである。この部分は冒頭部の

：高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の浄の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の敷きます国と 天の原石門を開き 神上り あがりいましぬ：

の部分と内容的に呼応している。この内容的呼応を重視して、日並皇子の殯宮が表現された部分を解釈すると次のようになるのではなからうか。

：(父、天武天皇のように即位され、宮を営まれるはずであったのに)どのようにお思いなされたのか、(ほんとうの宮ではなくて)ゆかりもない真弓の丘に宮柱を太くお立てになった(＝殯宮に籠られた)：

即位され、宮を営まれるはずであったのに、ほんとうの

宮ではなく、殯宮を営まれてしまったというのである。

人麻呂は「宮柱太敷きいまし みあらかを高知りまして：」という八即位と密着した宮の表現Vを以て八日並皇子が殯宮に籠ること(死)Vを表現したのである。しかも、即位への期待を述べた部分とその死を「いかさまに思ほしめせか」という句で結んでいる。人麻呂は「いかさまに 思ほしめせか」という句で八即位Vと八崩御Vという二つの相反する内容を結んでいるのである。逆にいえば八即位Vと八崩御Vを重ね合せて表現することによって、悲しみを際立たせているといえる。また「いかさまに 思ほしめせか」という句は、二つの内容の落差に対して向けられた悲嘆であるともいえよう。

以上のような表現手法は、当然のこととして、立太子していた日並皇子の死にふさわしい表現であったと思われる。とすれば、これは立太子していた皇子の死を印象づけようとする人麻呂の作歌意図の一環と見て大過ないものと思われる。

四、日並皇子挽歌の殯宮表現の背景

天智天皇挽歌群の「大殯之時」挽歌(2・一五一、一五四)では、八船Vをモチーフとして、死せる天皇が殯の儀礼を行なう宗教施設にすることを表現している。「大

「殯之時」歌が、船をモチーフとして死者の殯儀礼の場を表現しようとしたのに対して、「殯宮之時」挽歌では〈宮〉をモチーフとして殯儀礼の場を表現しようとしている。

この殯儀礼の場に対する表現のモチーフ・志向性の違いは、いったい何を意味するのだろうか。日並皇子挽歌に至って、新しい表現のモチーフ・志向性が浮揚してくるのはなぜなのだろうか。¹⁸身崎寿氏はいわゆる八殯宮挽歌Vの形成には、殯宮の設営地の問題が深く関わっているのではないかという見解を示されている。身崎氏は、歴代の天皇の場合とは異なり、生前居所の宮から遠く離れた葬地に殯宮が設営されたことが、公的でいて抒情的な挽歌を生み出す契機となったのではないかと述べられている。おそらくこの考え方だけが、日並皇子挽歌以下の「殯宮之時」挽歌が、どうして殯の儀礼の場を、皇子・皇女たちの新宮としてとらえようとするか¹⁹という問題に対して、解答を示し得る唯一の視点だろう。しかし、日並皇子挽歌の殯宮表現は、即位に引き付けられた宮遷りの表現であり、前述のとおり日並皇子を皇統譜の中に位置付けようとする明確な意図がある。しかも、日並皇子挽歌は三作品の嚆矢をなすものであり、他の二作品の鑄型ともなった作品と考えられる。このように考えてゆくと、挽歌の中に殯儀礼の場を皇子の新宮として表現し

なければならなかった八殯極的な理由V八特殊な事情Vがあったのではないのだろうか。それは、日並皇子挽歌の詠まれたタイミングと密接な関係があると思われる。

天武天皇の殯宮が終了して、五ヶ月後に日並皇子は亡くなる。日並皇子挽歌は持統天皇即位の前後によまれたと考えられる。このような時期に、日並皇子の殯宮は、天皇が宮を営む時に用いられる「宮柱太敷きまし…」と表現されたのである。前述のように、この表現は即位と密接に関わる死の表現である。そのように日並皇子の死を挽歌中に表現すると、天武天皇と日並皇子は、極めて強い一体感をもって表現されることとなる。すなわち、日並皇子の殯宮を天皇が営んだごとくに表現することによって八天武天皇→日並皇子Vという皇統が確認されたわけである。とすれば、このような表現のあり方を天武天皇殯宮から持統天皇即位という歴史の流れの中に位置付けてみる必要性があるのではないだろうか。日並皇子挽歌が披露された当時、それを享受した人々はそのほとんどが、天武天皇の殯宮へ奉仕をした大宮人たちであったはずである。それでは、天武殯宮が大宮人たちにとってどのような存在であったのか考えてみる必要がある。

表 天武天皇殯宮から持統天皇即位への流れ

年号	西暦	事項
天武天皇 ▽十五年	(六八六)	天武天皇崩御。 天武天皇殯宮起殯。 天武天皇事件。 大津皇子事件。 律令諸機構の職掌の誅が集中的に殯宮で奏される。
九・十一	…①	
九・二十九	…②	
九・二十七	…③	
九・三十	…④	
持統天皇称制 ▽元年正月	(六八七)	日並皇子が公卿・百寮人等を率て、殯宮へ適る。
…⑤		
▽二年正月	(六八八)	日並皇子が公卿・百寮人等を率て、殯宮へ適る。
…⑥		
十一・十一	…⑦	天武天皇殯宮終了。日嗣の誅が奏される。
…⑧		
▽三年正月	(六八九)	前殿に万国を朝しむ。
…⑨		
四・十三	…⑩	日並皇子没。
…⑪		
▽四年正月	(六九〇)	持統天皇の正月即位。
…⑫		

天武天皇十五年の九月九日に天武天皇は崩御する(①)。その三日後には飛鳥浄御原宮の南庭に殯宮が営まれる(②)。そして、この直後に大津皇子事件が起る(③)。大津皇子事件の三日後から、これまでの誅とは違った夕

イブの誅が次々と天武殯宮に奏されている。内廷・外廷、とりわけ当時整いつつあった律令諸官制の誅の奏上である。このような職掌の誅は『日本書紀』の誅の記事を通過しても、ここにしか見あたらない。このことは、天武紀に登場する天皇の政治(朝政)の場である前殿・大安殿・大殿・大極殿などと称される殿舎の機能が天武皇子事件のため、一時緊急避難的に殯宮に移っていることを示している。すなわち、これは死せる天皇の殯宮における朝政とみてよい。これらの誅は天皇の御魂に対して忠誠を誓うものとなっていたことは間違いない。それはそのまま、殯宮に籠っていたであろう皇后と皇后とともに殯宮の主宰者であったと思われる日並皇子への忠誠を誓うものとなっていたはずである(③)。このような殯宮の機能から、大宮人たちは殯宮を死せる天皇の宮(朝政の場)として強く意識したものと思われる。

殯宮を大宮人がどのように考えたかということを知るもう一つの手懸りは、天武殯宮の正月儀礼から持統天皇の正月即位礼への流れである。二年あまりに及ぶ天武殯宮が迎えた二度の正月の『紀』の記載を見ると、どちらも皇太子である日並皇子が八公卿・百寮人Vを率いて殯宮に詣でている(④⑤)。史学の和田萃氏の研究によれば、これは殯宮における朝賀ともいえるべきものであると

いう。このことは、殯宮に鎮まっている天皇の御魂に対して、正月の八みかどおがみVが行なわれていたのだと考えて差し支えない。天武天皇の殯宮が終了した持統称制三年の正月は、持統天皇が国々の宮人を前殿に朝集している(8)。すなわち、飛鳥浄御原宮において前殿と称される建物で行なわれるべき正月の臣下の参集が、天武殯宮において行なわれていたとみるべきである。この次年の持統称制四年の正月に皇后は即位する(9)。天武殯宮起殯から、持統天皇即位までの正月儀礼の流れをまとめると次のようになる。二年統きの正月殯宮参集(6)、持統称制三年の正月前殿参集(8)、そして四年正月の持統天皇即位へと続く。さらに時代が下り藤原宮では、大極殿で朝賀が行なわれる。

天皇御^二大極殿^一受^レ朝。其儀於^二正門^一樹^ニ烏形幢^一。
左日像青竜朱雀幡。右月像玄武白虎幡。

蕃夷使者陳^一列左右^一。文物之儀於^二是備矣^一。

〔統日本紀〕大宝元年正月乙亥朔条⁽²⁴⁾

すなわち、後に大極殿で行なわれる朝賀が天武天皇の殯宮において行なわれていたとみることもできよう。しかも、このような天武殯宮の正月朝賀を背景として、持統天皇の即位礼も整えられてきたと考えられる。おそらく殯の儀礼の場(殯宮)Vが、この時期に後の大極殿のよ

うな大殿舎Vとして強く意識される必要性があったのであろう。

天武天皇の崩御から大津皇子事件を経て、皇后・皇太子による皇親政治の後継体制を確立するにあたり、天武殯宮の儀礼の果たした役割は、大きなものであったと考えられる。人麻呂は日並皇子の殯宮を八天皇が新たに宮を営んだごとくVに表現する。おそらく、その背景には以上のように分析した儀礼を基盤に成立した殯宮に対する共通意識・共通理解があったはずである。人麻呂はこの共通理解を背景に、即位・宮遷りの讃美表現を、殯の儀礼の場の表現に用いたのである。

結、—日並皇子挽歌の背景

「殯宮之時」挽歌とは、生前居所から殯宮への宮遷りを歌う挽歌である。渡瀬昌忠氏が述べるごとく、日並皇子挽歌には「日月のまねくなりぬる」とあるから、皇子・皇女たちの遺体が殯宮に移ってから時がたち、殯宮の儀礼が終りに近づくころに、「殯宮之時」挽歌は作られたのであろう。

しかし、三つの「殯宮之時」挽歌は質も違い一概にこれを論ずることはできない。日並皇子挽歌の殯宮表現の特色は、「宮柱太敷く…」という即位して宮を営む表現

に引きよせて、殯宮が表現されているところであった。

後の高市・明日香の両挽歌の類型をなす、日並皇子の殯宮表現がこのような表現方法をとったのはどうしてか、その背景を本稿では考えてみた。日並皇子挽歌の冒頭の表現をみてもわかるように、人麻呂は天武天皇と日並皇子を一体感を持って描こうとする。英主天武天皇の崩御とそれを機とした皇親政治の危機の中で、日並皇子の殯宮を皇子が即位して宮を宮んだごとくに表現しようとするのは、天武天皇に続く、皇后・皇太子の皇統を確認するためである。しかも、二年余に及ぶ天武殯宮儀礼は大宮人たちに、この後継体制を確認させる役割を持っていたものと思われる。以上のような政治的意味を持つ殯宮儀礼の中で、殯宮が死せる天皇の宮として強く大宮人たちに意識されてきたのである。このような特殊な事情、あるいは共通した殯宮観を背景に成立した人新しい挽歌の形式が、「殯宮之時」挽歌といえるのではないだろうか。

△註▽

- (1) 平館英子氏「『殯宮之時』柿本朝臣人麿作歌」への考察「『国文自白』10」、武藤美也子・風間力三氏「人麻呂挽歌の『殯宮之時』をめぐって」(『甲南大学紀要』文学編第三

十六集)。

- (2) 渡瀬昌忠氏「柿本人麻呂研究島の宮の文学」および「万葉殯宮考——城上の宮・序説」(『万葉・その後』所収)、身崎寿氏「殯宮挽歌論序説(その一)——殯宮の設宮地をめぐって——」(『稿』二号)、犬飼公之氏「殯宮歌考」(『宮城女子学院研究論文集』五十九号)。

- (3) 「殯は死して棺在り、将に葬柩に遷さんとしてこれを資遇するなり」。(『説文解字』)

- (4) 西岡弘氏「中国古代の葬礼と文学」

- (5) 「文選」陸士衡「挽歌詩」

- (6) 一条兼良『日本書紀纂疏』

- (7) 「凡そ王より以下、庶民に至るまでに、殯宮ること得ざれ」。(『紀』大化二年三月二十二日)

- (8) 本居宣長『古事記伝』では、殯宮は天皇の敷設で、喪屋は庶人の敷設としている。

- (9) 『日本霊異記』の蘇生譚の中には、庶人の習俗としての殯の儀礼の様子をうかがい知ることのできる記事がある。例えば、下巻第九話「閻羅王、奇しき表を示し、人に勧めて善を修せしむる縁」、下巻第二十三話「寺の物を用ひ、復大般若を写さむとし、願を建て、現に善報の報を得る縁」など。習俗としての招魂儀礼・死後儀礼が、王権儀礼に浮揚してゆく過程があると思われる。

- (10) 太田善麿氏「高天の原の成立の意味」(『古代日本文学思潮論』Ⅱ)

(11) 吳哲男氏「殯宮の原型」(『古代文学』一八号)

(12) 天智天皇の場合、崩御が天智十年十二月三日、新宮での起殯が十二月十一日である。天武天皇の場合は崩御が天武十五年九月九日、南庭での起殯が九月十一日である。

(13) 舍人慟傷歌群に、

よそに見し真弓の丘も君ませば 常つ御門と待宿する
かも (2・一七四)

とある。

(14) 万葉挽歌においては、貴人の死は能動の動作・意志として表現される(青木生子氏『万葉挽歌論』)。ひとつだけ例を挙げれば、天智挽歌群では、

かからむのころ知りせば 大御船泊てし泊に標結は
ましを (2・一五一)

と詠まれている。「雲隠る」「神上る」も同様で、自己の意志として死んだように挽歌中には表現するようである。

「殯宮之時」挽歌の表現が八皇子・皇女の意志で殯宮を宮んだVようになってるのは、このような死の表現方法の発想類型によるのである。

(15) 日並皇子挽歌の殯宮表現は、絶対者の宮遷りとして表現され、即位にひきつけて表現されている。高市皇子挽歌の場合は、絶対者の宮遷りとして表現されてはいるものの、即位にひきつけた表現ではない。明日香皇女挽歌の場合は、城上の宮と夫君とのかわり(忍壁皇子との逢瀬の場)で殯宮が表現されている。

(16) 尾崎暢殃氏「天つ水」(『柿本人麿の研究』所収)によ

れば「天つ水」とは中臣の寿詞に登場する二上山の聖水とほぼ同義で、新帝がみそぎに用いる水であるという。とすれば日並皇子の殯宮に対する表現「天つ水・高知りまして」の部分は一即位↓宮を管むVということを示す表現であるといえる。すなわち、生ける天皇の宮の出現を期待していたのに、死せる皇太子の宮が管まれてしまったと表現しているのである。

(17) 「いかさまに思ほしめせか」という句については、さまざまな議論がなされている。しかし、この句を挽歌の詩句と規定してしまうのは、適当ではない。近江荒都歌には、

…いかさまに 思ほしめせか 或は云ふおも 天離る ひ
なにはあれど 石走る 近江の国の ささなみの 天
の下知らしめしけむ… (1・二九)

とあるように遷都に対しても使用されている。かえりみて日並皇子挽歌の場合も、表現上は、皇子の生前居所から殯宮への宮遷りに対して、この句が使用されている。とすれば、この句を挽歌の詩句と規定する必然性は薄いと思われる。しかし、使用例が挽歌に集中しているのも事実である。おそらく、この句は遷都や崩御などのはかりしれない思慮に向けられた言葉であろう。人麻呂は人知の及ばぬ、天皇やそれに準ずる者の思慮に対してこの句を使用しているのである。註(14)で述べたように貴人の死は、はかりしれない思慮からくる行為として挽歌には表現される。日

並皇子挽歌のこの句も、皇子のはかり知れない思慮の結果として、殯宮に籠ったことを表現しようとしたものだろう。

(18) 呉哲男氏は註(11)の前掲論文において、殯宮の原型を始源的には、古代の王が死すべきオホトノ(正殿・大殿)とされている。ただ、本稿が考察の対象とする「大殯之時」歌から「殯宮之時」歌へのモチーフの変化を見た場合、△船▽から△宮▽へのモチーフの変容が認められる。本稿は死者のいる場所を示すこのモチーフの変化に、新しい挽歌を生み出そうとする人麻呂の明確な作歌意図を読みとろうとするものである。

(19) 身崎寿氏「殯宮挽歌論序説(その一)―殯宮の設営地をめぐって―」(稿「二号」)「日並皇子殯宮挽歌試論―殯宮挽歌創成をめぐる一視点―」(稿「四号」)

(20) 桜井満先生「人麻呂の世界」(『柿本人麻呂論』所収)では、この時期を皇親政治の危機の時期ととらえている。

(21) 天武紀には「前殿」「大安殿」「大殿」「大極殿」「正殿」などと呼ばれる殿舎が登場し、天皇の主な政治の場となっている。しかし、どれとどれが同一の殿舎であるのか、またどの呼称が後代の修飾であるのか判断できない。これらの問題に決着がつくためには、飛鳥浄御原宮の宮地が確定し、発掘された藤原宮の構造と比較されなければならないだろう。

(22) 和田萃氏「殯の基礎的考察」(森浩一氏編『論集終末期

古墳』所収)、鈴鹿千代乃氏「殯宮と皇后」(『古事記年報』26)

(23) 用明紀、元年五月条に、敏達天皇殯宮の詠の一部と思われるものが伝わる。

朝廷荒さずして、浄めつかえまつること鏡の面の如くにして、臣、治め平け奉仕らむ

これなどは天皇靈への誓約といっても過言ではない。和田萃氏「服属と儀礼―殯宮儀礼の分析―」(講座『日本の古代信仰』第三卷所収)が強調するように殯宮儀礼は服属儀礼的内容を多分に含むものである。天武殯宮においても△壬生の事▽△宮内の事▽などの詠が多く奏上されている。これは詠が寿詞と同じく、それぞれの職掌を持って朝廷へ奉仕することの由来を語り、以後の服属を誓うものとして機能したためであろう。

(24) 『新訂』増補 国史大系 続日本紀』より引用。

(25) 渡瀬昌忠氏『柿本人麻呂研究 島の宮の文学』

(付記) 本稿は昭和六十一年度上代文学会大会(於・熊本女子大学)において口頭発表したものに、加筆訂正を加えたものです。席上、貴重など教示をたまわった諸先生、成稿にあたってお世話になった桜井満先生には、末筆ながらお礼を申し上げます。